

日本における初期のカフカの影響：第二次世界大戦前後

有村，隆広
九州大学：名誉教授

<https://doi.org/10.15017/1518295>

出版情報：Comparatio. 18, pp.18-36, 2014-12-28. 九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会
バージョン：
権利関係：

日本における初期のカフカの影響 — 第二次世界大戦前後

有村隆広

はじめに

筆者が「日本における初期のカフカの影響」という論文を執筆する契機になったのは次のとおりである。2011年、11月24日から26日の3日間、チェコのプラハ Praha で、カフカ文学の影響についての国際シンポジウムが開催された。シンポジウムの総合テーマは、「フランツ・カフカ — 影響、影響の阻止、非影響」(注1)であった。筆者もそのシンポジウムに参加し、「日本における初期のカフカの影響—第二次世界大戦前」(注2)というテーマで発表した。その後、シンポジウムの内容がまとめられ2014年7月、本になった。その本の題名は「フランツ・カフカ 影響と影響の阻止」(注3)であった。本論文では、この本に掲載された筆者のドイツ語論文(注4)を基本とし、その後の研究を総合的に加筆して、日本語に訳して論述する。

本論文について論述する前に、カフカ・シンポジウムの概要を紹介してみる。シンポジウムの総合テーマは、前述したとおり「フランツ・カフカ — 影響、影響の阻止、非影響」であった。このような、三つの副テーマが付くその理由は、カフカの文学が、今まで必ずしも、歴史的に、素直に受容されていなかったことによる。すなわち、彼の文学は、それぞれの時代の社会と政治に左右されていた。事実、カフカの文学は、1920年代の後半からナチス政権により発禁されたが、第二次世界大戦後には、資本主義諸国では実存主義作家として熱狂的に受容されてきた。しかし旧社会主義国においては政治的・社会的な制約のもとに監視された。その後、1963年、チェコスロヴァキア(注5)プラハ郊外のリブリツェでカフカ生誕八十周年を記念して、国際カフカ会議が開催された。これはマルクス・レーニン主義的な立場からカフカを再評価しようとするものであった(注6)。しかし、1968年のプラハの春の終焉により、カフカ研究は窮地に陥った。その後、1989年のベルリンの壁の崩壊によって、ドイツの統一が達成された。同時に、文学・思想の分野でも自由が保障されるようになると、カフカの文学も遂にすべての世界に開かれるようになった。

カフカ受容の経過を、このシンポジウムのプログラムに即して簡単に紹介してみる。(1) **Frühe Rezeption und Wirkung** (初期におけるカフカ受容と影響)、(2) **Kafka im Sozialismus** (社会主義下におけるカフカ)、(3) **Kafka und Mitteleuropa** (カフカと中部ヨーロッパ)、(4) **Kulturelle Bedingungen von Rezeption und Wirkung** (受容と影響の文化的な諸条件)。この(4)番目のテーマは、主として、第二次世界大戦後のドイツをはじめとし、西ヨーロッパ、アメリカ、日本等での研究方法に即した作品研究である。

今回、このようにカフカ文学の受容・影響を区分してのシンポジウムは、これまでのカフカ研究のほぼすべての分野を網羅しているといえる。このことは、まさしく1989年の西ドイツと東ドイツの統合、それにともなう東西の雪解けの成果であり、その意味で、このカフカ・シンポジウムは、政治的・社会的な障害を乗り越えた、グローバルなシンポジウムであったといえる。このようなカフカ受容の経緯を参考として、筆者は、本論文「日本における初期のカフカの影響 — 第二次世界大戦前後」について論述してみる。

1 研究者のカフカ解釈と翻訳

1) カフカについての最初の論文

岡村弘は、1932年（昭和7年）、「**Franz Kafka** — 『寂寥』の階級制 —」を、独逸文学研究第一号に執筆している。（注7）カフカが死去してからわずか9年後のことである。彼は、カフカの作品のなかで、次の作品群について論じている。『観察』、『変身』、『判決』、『流刑地にて』、『田舎医者』、『アメリカ（失踪者）』、『審判』、『城』。この論文は独逸文学研究1号の203頁から215頁までを占め、それぞれの作品についての記述は短い、いずれも核心をついている。彼は、まず文学研究の方法論について次のように述べている。

詩人の実生活を知らずに、単に作品のみから彼を論評することは、一般に非常な危険を冒すことになるだろう。ただし考察の対象となる詩人が現代あるいは最近に属する場合はこの危険さはかなり少なくなる。（論文、204頁）

岡村がこの論文を執筆したのは、カフカが死去してわずか9年後のことであり、カフカ研究についての文献はヨーロッパ諸国でも、マックス・ブロートのものを除いてはほとんどなく、まして日本では皆無であった。したがって、岡村がこのような研究資料の不足を危惧したのは、カフカ論を執筆するにあたり、研究者としての良識であったといえる。岡村はさらに論を続ける。

カフカは9年前に既に故人となった、が、カフカの偉大さが驚嘆されるに至ったのは生前発表された短編によるのではなく、彼の死後遺稿から **Max Brod** によって1925年、26年、27年と次々に出版された三篇のロマン、**Der Prozess**、**Das Schloss**、**Amerika** によるものであり、又、最近に至って彼の作品の仏訳、英訳が相次いで出版されたことは、カフカが1924年の肉体的生命が終わると同時に芸術的生命を失った作家ではないことを示している。というのは、彼の芸術的タレントが十年やそこの歳月で忘れられる程卑小なものではないと言わんとするのでなく、思想的に彼が未だ今日の作家であり、殊に我が国の小市民作家達にとっては彼らの明日の道

を示している作家でさへあるかも知れないという意味である。私が敢えてカフカ紹介の筆を起こした所以である。(論文、204頁)

岡村のこの論述のなかで注目すべきことが二つある。その一つは、彼がカフカの死後9年にして、すでにカフカの作品の全体像を把握していたことである。すなわち、生前に発表された短編集も大切であるが、1920年代の後半になってプロートによって出版された三つのロマン、『アメリカ』、『審判』、『城』がより重要であるという事実を認識していたことである。二番目に注目すべきことは、「殊に我が国の小市民作家達にとっては彼らの明日の道を示している」を予測し、それは現実のこととなっていることである。

第二次世界大戦前、1940年(昭和17年)、中島敦は、英訳でカフカの作品を読み、その影響は『山月記』のなかに反映されている。第二次世界大戦後、安部公房は『壁—S カルマ氏の犯罪』で昭和26年に芥川賞を受賞しているが、この作品は『審判』の影響を受けている。また、倉橋由美子の『パルタイ』、島尾敏雄の『夢のなかの日常』、小川国夫の『試みの岸』の第二部『黒馬に新しい日を』等も、カフカとの関係を指摘することができる(注8)。さらに二十一世紀に入ってから村山春樹が『海辺のカフカ』を執筆し、2006年、チェコのフランツ・カフカ協会からフランツ・カフカ賞(チェコ語:Cena Franze Kafky)を受賞している。このように多くの日本の作家たちがカフカの影響を受けて小説を書いている。日本文学の未来に対する岡村の1932年当時の鋭い展望に敬服せざるを得ない。また、研究者の場合、第二次世界大戦前は、カフカについての論文は岡村の論文(1932年)一編であったが、1945年の終戦を経て、1974年には170編を超えるまでになった

2)『変身』と短編集『観察』の「街の子供」(注9)について。

岡村は先ず『変身』について次のように論じている。

„Die Verwandlung“ (1915年) 短篇。 — 一人の薄給サラリーマンが氷雨の降る朝、重苦しい夢から覚めると、一夜の裡に自分の姿がむくつけき一匹の蟲に変っていた。出勤時間を知らず為妹が扉を叩くが返事をしようとしてももう人間の声は出ない。父が扉をこじ開けて入ってくると、息子の姿は見え、床の上には一匹の大きな虫が蠢いているのであった。(中略) 恐ろしく冷たいこの現世からこの善良な魂は去って行くのである。(論文、206頁)

このように、岡村は、『変身』の内容について記述した後、さらに次のように分析している。

この一篇にはプロート(注10)のいう *mehr—als—Realität* (現実よりもさらに多くのもの — 筆者注)がある。甚だしく非現実的な物語でありながら、写實的

克明さを持って小市民の生活を描きだした他のいずれの作家の作品よりもより多くの現実さを持って、より grell (鮮明 — 筆者注) に、我々に小市民層の運命を見せつける。(論文、206頁)

つまり、岡村は、カフカの作品は非現実的手法で描かれてはいるが、それらはまさしく現実の世界を表現していることを見抜いている。そして『変身』の本質にせまって、次のように論じている。

この悪夢にも似た一篇が読者の心底に刻みつけていくものは何か？ マックス・ブロートやウィリー・ハースのいうところの「人間の寂寥」、私が「小市民層の、孤独感、寂寥感」という方がより正しいと信じる所のものである。ここでは人間一般の寂寥を問題とするのは正しくない。あらゆる意味で袋小路に落ち込んだ、まったく孤独にある小市民層の寂寥感が問題とさるべきだ。(論文、207頁)

岡村はさらに、この寂寥な世界は、カフカの全作品の基調をなし、同時に現代社会(1932年(昭和7年)当時 — 筆者注)の背景にあるものであり、さらに現代のあらゆる純粋な小市民芸術の底を流れる地下水である、と述べている。前述したように、カフカの文学は、まぎれもなく、現代日本の作家たちのかなりの作品の「地下水」となっている。

「街の子供」は、短編集『観察』(1912年)のなかの一編である。主人公の少年は、両親の家の庭の木陰で小さなブランコに腰かけて、はるかな世界に向けて夢をみている。その後、家の外にかけだし、南の都会を目指して進んでいく。岡村はその少年の世界を次のように述べている。

この詩人の第一作において読者にぶつつかるものは、おぼれるような感覚美と深い心情との不思議な(中略)である。巻頭を飾る『町の子供』が最も鋭くこの特徴を示している。 — 中産階級の腺病質な少年が長い患いがやっと癒えた頃、夕焼けの空の美しさに誘われて庭の扉口から抜け出て街の子供の群れに入る。(論文、205頁)

子供達と別れ、主人公の少年は、期待に胸をふくらませ、南の都会をめざして進んでいく。このような少年の姿を、岡村は、「カフカのロマンに於いて特に感じられる呼吸器病患者に特有な微熱を持った澄明さとも言うべきものがすでにこの作品に於いて強く出ている。」と結論付けている。ここで注目すべきは、「微熱を持った澄明さ」という記述であるが、これは、岡村が、『変身』の寂寞さとは異なり、カフカ文学の背後に見え隠れする一種の明るさにも、焦点を当てていることを証明している。

3) 岡村の第二次世界大戦後の論文

岡村は、第一の論文「Franz Kafka — 『寂寥』の階級制 —」を執筆した後、実に2年後の1954年(昭和29年)に、第二の論文「カフカ文学の意味」をドイツ文学12号(注11)で論じている。その間22年の歳月が流れているが、日本は日中戦争、太平洋戦争(第二次世界大戦)を経て、1945年(昭和20年)の終戦により、ようやく平和を取り戻している。戦争に次ぐ戦争の歳月は、文学研究に専念する余裕は岡村にとってもなかったといえる。22年の歳月を経て、岡村は、再び、カフカ文学に取り組み、第二の論文「カフカ文学の意味」で、次のように論述している

二十世紀前半のドイツの作家のうちで今日カフカほど多く論じられる作家は少ない。しかし多く論じられれば論じられるほど、カフカは難解な、一般の文学愛好家には近づきたい作家になりつつあるような気がする。(ドイツ文学12号、13頁)

そして、その難解さの第一点について、「彼の作品にはユダヤ神学の知識なくしてはどうも十分に理解され難いなどと言われると、それにはほとんど関心を持たない日本人としては、何か自分たちには関係のない文学のような気がしないでもない」(ドイツ文学12号、13頁)と、慨嘆している。

彼のこの発言は、岡村に限らず、今もってなお、私達日本人が直面する課題でもある。事実、ウィリー・ハースは、「1880年から1890年の間にブラグ(チェコ語では、プラハ — 筆者注)に生まれなかったような人がおそそカフカを理解出来るなんて私にはどうい信じられない」(注12)と、断言している。その第二の難解さについて、岡村はさらにカフカ文学を実存主義的に解釈することについて次のように述べている。

さらに実存主義作家として論じられる場合、実存哲学という難解な哲学がカフカをさらに難解にするかにみえる。この作家が私たちの手のとどかない、遙か遠くの方へ持ち去られた感じさえする。(ドイツ文学12号、13頁)

第二次世界大戦後、フランスの実存主義作家、アルベール・カミュの著作『シジフォスの神話』(注13)の付録「フランツ・カフカの作品における希望と不条理」が、日本のゲルマニストの脚光を浴びた。カミュは、「カフカの世界は実際、何もそこから出てこないことを知りながら浴槽で魚を釣るという身をかむ贅沢が人にあたえられている言語に絶する宇宙なのである」(注14)と述べ、カフカの作品は不条理の文学であると断言する。しかし、他方、彼はまた、「カフカについて語った大部分の人は、実際、彼の作品を如何なる救いも人間に残されていない絶望的な叫びだと定義した。だがこのことは再検討を要する。ここには希望また希望があるのだ」(注15)と述べている。カミュも、カフカの文学に不条理の世界を認めながらも、他方、希望の光があることも認めている。

山下肇は、1948年（昭和23年）、「思潮」の一月号に、「実存のロマネスク」を掲載し、カフカとの関連を論じている。またその後、『カフカ — 現代の証人』を、1968年（昭和46年）、朝日出版社から出版している。岡村も山下と同様に、カミュの実存主義的なカフカ解釈に触れ、その魅力と難解さに触れているが、岡村は、カフカと実存主義との関係に一定の距離を保っている。

カフカを実存主義作家と呼ぶことが正しいかどうかは私は知らない。ただ実存哲学によって鋭角的に代表される二十世紀の不安が、そのまま、彼の作品の特徴的な雰囲気であることは否定できないであろう。（ドイツ文学12号、16頁）

つまり、岡村は、ユダヤ神学的の有する神秘性、ならびに実存主義的解釈の難解性にある種の違和感をおぼえながらも、そのような時代の流れのなかで、カフカ文学の本質も様々に解釈されていることも、認識している。

また、岡村は、カフカの文学は、永遠の安らぎの世界を求めていると論じている。それは、長編小説『アメリカ（失踪者）』の主人公、カール・ロスマンが、オクラホマ野外劇場の理想社会のなかに入り込もうとする姿、そしてまた、最後の長編『城』で、主人公の測量技師のKは、あらゆる蹉跌、失望、絶望にも関わらず、城の中に入り込み、そこで永遠の安らぎを得ようと、絶え間なく努力している、と述べている。1932年における第一論文に於いて、岡村は短編集『観察』の「国道の子供たち」の主人公は、突然「堪らない郷愁に襲われる」と書いているが、これは、『城』の土地測量師、Kの心と相通じている。岡村は、さらに次のように論述する。

カフカの作品を成心（せいしん：先入観 — 筆者注）なしに読む読者は、彼がその作品の暗さにも拘らず、一つの希望、夢をもっていたことを否定しないだろう。否、この点にこそ、混乱と不安の時代において、カフカが特別な魅力を持ち、世界的名声を得るに至った原因があるのではないだろうか。（ドイツ文学12号、17頁）

岡村は、この時点において、まさしく二十世紀の初めと同じく、二十一世紀にも通用するカフカ文学の普遍性を予測していたといえる。

4) 日本で最初の翻訳と『審判』の作品解釈

(1) 羽白幸雄の翻訳。日本で最初にカフカの作品を翻訳したのは、羽白幸雄である。彼は、1933年5月（昭和8年5月）、短編集『田舎医者』から、「兄弟殺し」と「隣り村」をカスターニェンの第2号（京大独乙文学研究会）に掲載した。また、同年九月に、短編、「橋」、「小さな寓話」、「プロメートイス」、「夫婦」が、同人誌「日輪」の創刊号に掲載された。これらはいずれも研究会の会報、同人誌であったので、市民に広く紹介される

ことはなかった。これらの翻訳は第二次世界大戦後24年の歳月を経て、カフカ遺稿抄として、羽白の著書、『点心帖』（徳間書店、昭和44年）に転載された。

（2）本野享一の翻訳。本野は1940年（昭和15年）、白水社から『審判』の翻訳を出版した。定価は一円五〇銭であった。売れ行きは悪く、購入者はほとんど一桁であったが、読者のなかに第二次世界大戦後カフカの影響を強く受けた安部公房がいた。

しかし、いずれにしても本野の『審判』は、日本で市販されたカフカの最初の翻訳書であった。1940年（昭和15年）といえば、日中戦争のさなかであり、また太平洋戦争の前年であった。また、全世界が第二次世界大戦の破局へと向かっていた。このような厳しい世界情勢のなかでカフカの『審判』が、戦火に明け暮れる日本で公然と出版されたことは、まさに驚異すべきことであった。当時、ドイツではカフカの文学は発禁の対象であった。また、当時のチェコスロヴァキアでも、カフカのチェコ語による本格的な翻訳はなされていなかった。カフカの影響を受けて執筆された中島敦の『山月記』は戦時中の1942年（昭和17年）に、「文学界」に掲載された。このような状況は、カフカの文学は、当時の日本では、政治的・社会的な影響を受けなかったことを意味している。その原因の一つは、彼の文学がいまだ、ごく少数の人々にしかしられていなかったことにもよる。なお、本野の『審判』は、第二次世界大戦後1953年（昭和28年）に、角川書店より改訂版が出された。

（3）本野のカフカ解釈 — 『審判』

本野は、彼の初版『審判』の翻訳のはしがきで、「フランツ・カフカの生活と作品」という副題をつけて、カフカ文学について紹介している。この紹介文は、19頁におよんでいるので、「はしがき」というよりは、一編の論文と評価してもよいと考えられる。彼は、まず、カフカの家事情、職場での葛藤、結婚への忌避と憧れ、病気（結核）のこと等について論じている。つまり、本野は、カフカの有する伝記的事実の特色を挙げている。

すべての日常生活、すべての“文学でないもの”は、それぞれの形でカフカにとって仇敵であり、肉体の不幸が、「不安」となって彼を追いつめていくのだがこのような状態で書くことを愛し、何等かの意味で作品に安住する余地だけが残されているのなら、我々はむしろ安堵して、暗黒のなかにぼつりとひとつひらめくその光に温かみをおぼえるだろう。」（はしがき、14頁）

本野は、「文学でないものはカフカにとっては仇敵である」というものの、カフカ文学の中に、「暗黒のなかにぼつりとひとつひらめくその光」を見つけようとしている。彼は、カフカは、不安と孤独を描き、それは彼の訳した『審判』の主人公、ヨーゼフ・Kの行動のなかで論じられていると分析している。ヨーゼフ・Kはある日の朝、突然裁判所の役人に逮捕されるが、弁護士も、裁判官も、その他の人々も彼の無罪を立証して

くれば、彼の不安はますます深まっていくが、これは作者カフカその人の心の葛藤であると論じている。さらに、本野は、『変身』について次のように論じている。

『審判』で家庭生活は殆ど描かれていないが、三十歳の時に書いた百枚ほどの「変貌」(注16)では、アパートに住む貧しい一家、父、母、妹、そして主人公である長男グレーゴル・ザムザの描写が、カフカの家庭生活からの取材を思わせ、手記にあるとおりの全く理解されぬ孤独、周囲と絶縁された孤独にザムザは住む。(はしがき、24頁)

本野は、主人公のグレーゴル・ザムザは一匹の奇怪な虫に変貌(変身—筆者注)するが、彼も家族に見放され、『審判』のヨーゼフ・Kと同じように孤独のなかで死んでゆくと述べ、『変身』においても、カフカは、「不安と孤独」を描いている、と分析する。

その後、本野は、召集令状を受け戦役に就き、戦後の1946年(昭和21年)、復員した。復員後、1948年(昭和23年)本格的な論文「不安と脱出 —フランツ・カフカ論」を「世界文学」2月号に執筆した。それは、本野が『審判』を翻訳し、終戦を挟んで、8年後のことであった。

彼はこの論文で、中期の短編集『田舎医者』の一編である『あるアカデミーへの報告』を分析して、カフカの作品は「不安からの脱出である」と、論じている。主人公の猿はアフリカでとらえられドイツに送られ、そこで必死の訓練を受けてヨーロッパ人一般の知識水準に達する。しかし、彼が求めたものは、不安からの自由ではなくて、不安からの“*Ausweg*”(脱出)であると、解釈する。本野は、カフカの文学は、脱出への試みの連続であり、その意味では、彼の姿勢は屈服でなく、敗北でもなかったのであると論じている。(注17)

5) まとめ

最後に、岡村と本野のカフカ論を、現在の立場から概観してみる。一般に文学研究は、先行研究を土台として論述される。カフカの先行研究においては、主として次のような解釈がなされている。1) 宗教的(ユダヤ教・シオニズム)解釈、2) 心理学的・深層心理に基づく解釈、3) マルクス主義的・社会批判的解釈、4) 文学社会学的解釈、5) 実存主義的解釈、6) 存在論的解釈、7) 伝記的事実に基づく解釈、8) 受容美学に基づく解釈、9) (プラハ、ボヘミア)をめぐる文化史的・歴史的解釈等がある。

岡村の第一番のカフカ論文は、カフカの死去後わずか9年しか経っていないので、当然のことながら二十一世紀の現在におけるほどの先行文献を参考にすることは出来なかった。彼はカフカの親友、ユダヤ系ドイツ語作家のマックス・プロートやウィリー・ハース等のカフカに関する論述・記録等は読んでいた。したがって、岡村は、プロートのユダヤ主義的な解釈は、広い意味での宗教的意味ではカフカ文学にもみられることは認識していた。また第二番目の論文で、第二次世界大戦後のカミュの影響による実存主義的解釈にも一定の理解を示し

ていたが、カフカの文学は実存哲学そのものの発露ではないと述べ、彼の文学は、混乱と不安の二十世紀の世界を描いている、と論じている。

他方、本野は、社会全体の現象というよりは、カフカの心の悩みに焦点を向け、カフカの文学は人間の不安と孤独を描いていると述べ、戦後の論文で、カフカの文学は、不安からの脱出を目標としていると結論づけている。彼はカフカの文学が実存主義的な文学であるという解釈には組みしなかった。また、本野も、プロートの宗教的なカフカ解釈には理解を示したが、カフカ独自の内面世界へと焦点を絞っているといえる。したがって彼のカフカ解釈はカフカの伝記的事実を基にして、心理学的な一面をも有している。当然のことながら、先行研究はそのままの形では、岡村、本野のカフカ解釈には合致しない。それは、両者とも、先行研究がなされる以前に、それぞれのカフカ論を執筆したので当然のことである。

岡村、本野の両研究者とも、カフカへの視線は異なるが、カフカ文学は否定と絶望を秘めつつも、希望と自己確立の文学でもある、と述べている。両者のカフカ論には、第二次世界大戦の戦争体験、外部世界からの政治的な圧力は、直接的には存在しない。その意味では、両者とも、まさしくカフカの作品世界をそのまま心の中に受け入れている。

2 カフカ文学に接した最初の作家 — 中島敦の『山月記』とカフカの『変身』

1) 中島敦の文学と生活

日本の作家で最も早くカフカの影響を受けたのは中島敦である。中島は1909年東京で生まれ、旧制の第一高等学校で、第二外国語としてドイツ語を学んだ。1930年、彼は東京帝国大学で日本文学を学んだ。1932年3月、23歳の若さで、橋本たかと結婚する。1933年卒業。卒業論文は、「耽美派の研究」。4月から横浜の高等女学校で国語と英語を教えた。1934年、『虎狩り』を執筆する。1936年11月、『狼疾記』、12月に『かめれおん日記』を書く。1937年『北方行』を書くが未完。1941年3月、横浜高等女学校を退職する。4月から5月にかけて『山月記』を脱稿する。6月、当時日本の委任統治領であった南太平洋のパラヲ島に渡り、現地の子供たちに、国語編集書記として日本語を教えたが、日本語教育の在り方に不満をもらしていた。1942年、2月に『山月記』と『文字禍』を、「古潭」と題して、文芸誌「文学界」に投稿する。1942年3月、持病の喘息が悪化したので帰国する。5月、『光と風と夢』を文学界に発表する。『光と風と夢』は芥川賞候補となったが、受賞せず。同年12月4日に、喘息の発作と心臓衰弱のため、33歳の若さで死去した。

中島家は江戸時代より続く儒家の家柄であった。中島の両親は、彼がまだ幼児の時に離婚していた。したがって、彼は既に幼少の時に家族の暖かさを失った。彼の父親は国家公務員だったので、しばしば転勤を繰り返していた。そのため中島は故郷喪失の感をいだいていた。

彼は既に早くから、ギリシャ・ヨーロッパの文学者、哲学者等の書籍に親しんだ。プラトン、ヴォールテール、ゲーテ、クライスト、トーマス・マン、そしてカフカ等を読んだ。特

に、旧制高校では、ゲーテの『詩と真実』に感動した。他方、彼は中国の古典にも関心を寄せ、列子、莊子等を学んだ。

2) カフカ文学との接触

中島は高等女学校教師として勤務している間、1934年から1936年2月にかけて、英語訳でカフカの『シナの長城と他の作品群』(The Great Wall of China and Other Pieces)を読んだ。おそらくこの翻訳は、1933年、エドウィン・ミュア (Edwin Mur) によってなされたものであろう。中島はそのうえ、この翻訳に掲載されているアフォリズム「罪、苦悩、希望、真実の道についての考察」を日本語訳した。109項目の中で10項目まで訳している。最初に訳した第一のアフォリズムを紹介してみよう。

真実の道は一本の綱 — 別に高くはられているわけではなく地上からほんのすこしの高さにはられている一本の綱をこえていくのだ。それは人々がその上を歩いていくためよりも、人々がそれに躓くために作られているように思われる。(『中島敦全集』2巻、457頁)

この文章は、真理を求めるのは至難の業であり、真理を求めているつもりでもその道は別の方向へ向いているのかもしれないことを、述べている。

さらに、中島は、やはり英語で、カフカの『巢穴』を読んだ。そして、次のような読後感を、1936年(昭和11年)執筆の『狼疾記』で、その主人公に次のように語らせている。

今、彼の読んでいるのはフランツ・カフカという男のあな(巢穴—筆者注)という小説である。小説とはいったが、しかし、何という奇妙な小説であろう。其の主人公の俺というのが、もぐらかいたちか、とにかくそういう類のものには違いないが、それが結局最後迄明らかにされてはいない。その俺が地下に、ありったけの知能を絞って自己の棲處(すみか)—あなを営む。想像され得る限りのあらゆる敵や災害に対して最新周到な注意が払われ、安全が計られるのだが、しかもなお常に小心翼翼々として防備の不完全を恐れていなければならない。殊に俺を取囲む大きな「未知」の恐ろしさと、その前に立つときの無力さとが俺を絶えざる脅迫観念に陥らせる。(『中島敦全集』1巻、423頁)

『狼疾記』の主人公の三造は、カフカの作品の主人公が自分の棲み処(巢穴)の安全を守れば守るほど、その棲み処の安全性が不完全であることに気付くことに注目する。この場合、三造は、狼疾記の作者の中島敦の分身であるといえる。中島は、『巢穴』の主人公の奇妙な行動をとおしてカフカと同じように人間存在の意味に思い悩んでいる、と言えよう。中島は、人間はいかにして存在根拠を獲得できるか、という問いかけに答えを求めようとする。前記に引用した『狼疾記』の主人公の三造の思考経緯には、日本人作家、中島とカフカとの最初の出会いが、明確に表現されている。中島とカフカは人間存在について共通の認識をもって

いる。中島は1933年（昭和八年）頃執筆した未完の小説『北方行』のなかで、事物について次のように述べている。

永い間、彼は自分と現実との間に薄い膜が張られているのを見出すようになった。そして、その幕は次第に、そして、つひには、打ち破りがたいまでに厚いものになって行った。（中略）彼は、ものに、現実には、直接触れることができない。（『中島敦全集』2巻、109頁）

カフカも初期の作品断片『ある戦いの記述』の草稿Bの中で同じようなことを述べている。

ずっと前からあなたの眼差しに慰められていた。あなたから教えてもらいたかったのです。まわりのものが雪崩のように沈んでいくような気がしてならない。いいですか、ほかの人には、テーブルの上にリキュールのグラスが記念像のようにしっかり立っているのです。（注18）

中島が『北方行』を書いていた頃は、カフカの『ある戦いの記述』は日本ではまだ出版されていなかった。従って中島がカフカの『ある戦いの記述』を読むことは不可能であった。したがって、その意味においては、中島とカフカの考えが同じであったといえよう。つまり、両者とも同一の視点からこの現実の世界と人間存在を凝視していたといえる。

3) 中島の『山月記』とカフカの『変身』

(1) 『山月記』のストーリーについて。中島は1941年（昭和16年）、4月から5月にかけて『山月記』を書いた。1942年2月『山月記』は、文芸誌「文学界」に掲載され、高い評価を得たので、その後、第二次世界大戦終了後も国民教材として、国語の教科書にも採用された。（注19）

『山月記』の舞台は、当の玄宗皇帝時代（西暦742—756年）である。主人公の李徴は、科擧の試験に合格した優秀な役人である。しかし、彼は役人としての生活に疑問を感じ、故郷に帰り、ひたすら試作に耽る。彼の文名は容易に上がらず、生活は日を追うごとに苦しくなり、妻子を養うことが困難になる。そこで、彼は再び役人になるが、詩作への道は捨てがたく、悶々の日を送る。李徴は、詩作の才能が失われたのではないかと絶望する。ある年、李徴は公用の旅に出て、ある田舎の宿に泊まるが夜中にある声に呼び覚まされ、突然起きて、夜の闇の中に消えていく。そして、いつの間にか自分が虎に変身しているのに気付く。その後、人間の世界に戻ってくることは出来ない。しかし、数時間だけは人間の心に戻ることが出来る。ある日、森の中で、同じ役人で旧友であった袁愔に出会い、虎に変身したことを切々と語り出す。

谷川に臨んで姿を映してみると、既に虎になっていた。自分は初め眼を信じなかった。次にはこれは夢に違いないと考えた。(中略)しかし、なぜこんなことになったのだろう。分からぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分からずにおしつけられたものを大人しく受け取って、理由も分からずに生きて行くのが、われわれ生きもののさだめだ。自分はすぐに死を想うた。(『中島敦全集』1巻、24頁)

「なぜこんなことになったのだろう」と自問しながらも、さらにその理由を追究しようとする。李徴は詩作によって名を成そうと思いながら、進んで師に就いたり、詩友と交わって切磋琢磨することもしなかった。そうかといって、また俗物の間に伍することも潔よしとしなかった。それは、彼の臆病な自尊心と羞恥心が原因となっている、と反省する。そして、人間は誰でも猛獣使いであり、その猛獣にあたるのが各人の性状であるという。彼の場合、この尊大な羞恥心が猛獣であったのである、すなわち、虎であったのだと自戒する。

李徴の説明によると、彼の心のなかにある「尊大な羞恥心」、すなわち「詩人として評価されないこと」が、虎への変身を誘発したということになる。李徴は、そのように慨嘆すると、泣きながら森の中に消えていった。

中島は、この『山月記』を、8世紀の唐の詩人、李景亮の『人虎伝』を素材(粉本)としている。(注20)

(2) 『変身』の主人公、グレーゴルの変身

『変身』は1912年の12月に執筆された。中島がカフカの『変身』を読んだという確たる証拠はない。しかし、彼は前述したように、『巢穴』に触れ、また、アフォリズム等を訳したこと、さらに、長編『城』を読んだことなどを考えると、ほぼカフカ文学の全貌を把握していた、と考えてよい。したがって、『変身』との比較も必然性があり可能であると、考えられる。

『変身』の主人公のグレーゴル・ザムザは、ある日の朝、不安な夢から覚めてみると、自分がベッドの上で、巨大な虫に変貌しているのに気付いた。彼は鎧のように固い背を下にして仰向けに横たわっていた。見回す周囲は自分のいつもの部屋であった。夢ではなかった。

彼は、父親が商売に失敗した後、その負債を返済するために、そして両親と妹を養うために終日働いた。虫に変身したとはいえ、彼の意識は人間のままであり、列車(汽車)の時刻を気にしながら、出勤の準備をしようとする。

なんてひどい仕事にとついたらものだ。くる日もくる日もセールスに出る。旅回りは本店務めよりも気が疲れる上に、旅回りにつきものの厄介なことがある。(中略)まったくいやになっちゃう！(『カフカ小説全集』4巻、95頁)

グレーゴルは、セールスマンとしての職をやめて、自由に生きたいと考えるが、そのようにふるまうことはできない。カフカは作品のなかでは変身の理由を述べていない。しかし、

グレーゴルの職業上の苦悩が変身という妄想に陥ったと考えられる。これは、後述するように、1912年当時のカフカの現実の生活に類似している。

なお、グレーゴルの変身は、アルキメデスの点（注21）から見たこの現実の世界であるという解釈もある。グレーゴルはアルキメデスの点からこの現実の世界を観察する。アルキメデスの点から見たこの世界はもはや論理的整合性とか、絶対の真理は存在しない。それ故グレーゴルは現実世界のさまざまな不条理にもてあそばされ、生存の基盤を失う。奇怪な虫への変身がそれを意味する。

（3）『山月記』の主人公、李徴の変身

他方『山月記』の主人公は、仕事で出張中、真夜中に宿屋を抜け出し、森の中をさまよっているうちに、谷川の水面を見て自分が虎になっているのに愕然とする。両者とも二度と人間の世界に帰ることは出来ない。その点では両者の運命は一致している。

しかし、両者には大きな違いがある。グレーゴル・ザムザは、彼がなぜ変身したのか理解できない。また、なぜ変身したかその理由を知ろうとも思わない。それに対し、李徴は、彼の昔の友人に、なぜ虎に変身したかを語りかけることが出来る。李徴は自分の変身の理由を次のように述べる。

人間は誰でも猛獣使いであり、その猛獣にあたるのが、各人の性状だという。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だったのだ。（『中島敦全集』1巻、27頁）

李徴の説明によると、虎への変身は、彼の心のなかに潜んでいる羞恥心であるということになる。彼の場合この羞恥心は詩を書くこと（詩作）に対する絶望の念である。同時に、詩人として誰からも尊敬されない絶望感から生じたものである。李徴の変身の第一の理由は、自分の詩作が世間に評価されないことにある。さらに、なぜ世界に認められないかその理由と自分自身の生き方に存在論的な疑念をいだいているためである。第二の理由は、彼が自分の家族の世話よりも詩作を重んじたことにある。なぜならば、彼の行動、すなわち、詩作に没頭する事によって、彼の家族は飢えと寒さによって瀕死の状況になっていたから。李徴は、家族に対する彼の無慈悲を恥じらい、そのことも虎への変身の要因となったと考えている。

（4）伝記的な解釈 — グレーゴルの家族と李徴の家族との対比

『変身』のグレーゴルは、変身した後も家族に対して深い愛情を抱き、それを誇りにしている。

それにしてもまわりが静かすぎた。誰もいないはずはないのだ。「なんて静かな暮らしをしている一家だろう」と、グレーゴルは思い、暗闇にじっと目を据えたまま、大きな誇りを感じた。まさに自分が両親と妹に、このような素敵な住居とこのように平和な生活を実現したのだ。ところが、すべての安らぎと、すべての贅沢と、すべての満ち足り

た思いが、とっぴようしもないことで終わってしまったとしたらどうだろう？（『カフカ小説全集』4巻、116頁）

変身したことによって職を失ったグレーゴルに対し、家族は冷たくなっていくが、彼は未だに家族への愛を抱いている。しかし、グレーゴルは父親が投げたリンゴが体に当たり、その傷が原因で、死去する。それを見届けた父親は、「やれやれ神様に感謝しなくちゃ」と、つぶやく。その後両親と妹のグレーテは、ピクニックに出かける。『変身』ではグレーゴルの残酷な死去と妹のグレーテの幸せな未来が、対照的に描かれている。

『変身』ではカフカの家族関係が反映している。『変身』を書いていた当時、カフカの父親はアスベスト工場を経営していた。カフカの義弟が兵役で工場を運営できなくなったので、彼がその工場の手伝いをさせられた。カフカは本職の労働者災害保険局の仕事を済ませたのち、そのアスベスト工場で働かなければならなかった。この仕事は、カフカにとっては耐えがたいものであった。彼は、天職と考えていた文学の仕事に従事する時間が殆どなくなってしまった。当時の日記に「今日は一字も書かなかった」という意味の文章をしばしば書いている。父親はそのようなカフカの態度に不満をつのらせていた。カフカは当時、父親との確執で苦しんでいた。その時の苦しみが、カフカに『変身』を書かせる一つの要因となったことは疑いない

『山月記』では、家族関係はまったく異なっている。李徴は家族を愛し、妻や子供達も彼を信頼しているので、家族間の対立相克はなかった。しかし、彼が虎に変身したことによって、家族に愛情示すことも出来なくなり、家計を支えることも不可能になった。李徴は彼の旧友の衰憐に、家族を助けてくれるように懇願する。

だがお別れする前にもう一つ頼みがある。それは我が妻子のことだ。（中略）固より己の運命については知る筈がない。君が南から帰ったら、己は既に死んだと彼等に告げて貰えないだろうか。（中略）厚かましいお願いだが、彼等の孤弱を憐れんで、今後とも道塗に飢凍することのないようにはからって戴けるならば、じぶんにとって、恩倖、之に過ぎたるは無い。（『中島敦全集』1巻、28頁）

中島は、33才の若さでなくなった。彼は既に学生の時、妻の「たか」と結婚し2人の子供がいた。彼の妻は彼の死後、『山月記』について次のように話している。

ある日、彼は台所にやってきて、今、人間が虎になる話を書いたよ、と私にいいました。彼は、今までわたくしに彼の小説のことなど話すことなどありませんでした。彼はその時とても悲しい顔をしていました。彼の死後しばらくして、『山月記』を読みました。その時、私は彼の声を聴いたような気がして、悲しくなりました。（『中島敦全集』別巻、229頁）

中島はおそらく、喘息の悪化と心臓の衰弱による自分の運命を予知していた。その死を作品のなかで、主人公を虎へ変身させることによって表現したといえよう。

3 作家として人生 — カフカと中島

グレーゴル・ザムザと李徴はもはや、現実の世界で生活することはできない。グレーゴルは死去し、李徴は虎に変身し野山を放浪し、両者とも、人間にたちかえることはできない。この意味ではカフカと中島はニヒリズムの世界に生きているかに見える。しかし、カフカと中島にはもうひとつ、別の世界が存在している。『変身』のなかで、グレーゴルの妹はバイオリンを弾き始める。その美しい調べにグレーゴルは引き寄せられ彼女の方ににじり寄り次のように考える。

グレーゴルは、また少し前へ乗り出し、妹のまなざしにでくわすように、顔をびったり床に着けた。動物だからこそ、それで音楽がこんなに身にしみるのか。ひそかに求めている未知の食べ物への道が示されたような気がした。(『カフカ小説全集』4巻、144頁)

グレーゴルは、妹のバイオリンのしらべの中に、永遠の世界を見出したような気がした。彼のこのような考えには、救済への願望が潜んでいる。グレーゴルの第二の分身ともいうべき、長編『城』の測量技師のKは、救済を求めてさらに努力した。カフカ全集の編者でもあるマックス・ブロートは、この長編『城』をカフカの『ファウスト』であると解釈している。そしてその際ゲーテの『ファウスト』第二部の天使たちの次の詩句をカフカの『城』と対比させている。

霊の世界の高貴な一人が
悪から救われました
たえず努力していそしむものは
わたしたちが救うことができます (注22)

ブロートによれば、カフカもゲーテの『ファウスト』に登場する天使たちの詩句に憧れ、絶対的な存在根拠、すなわち永遠の救済を求めている。

『山月記』の主人公の李徴は、虎に変身した自分の運命について、「全く何事も我々には判らぬ。理由も分からずにおしつけられたものを大人しく受け取って理由も分からずに生きて行くのが、われわれ生きものさだめだ」と慨嘆する。(『中島敦全集』1巻、47-48頁)

この文章の李徴の発言「全く何事も我々には判らぬ」は、人間は絶対的な真理を知ることが出来ないことを述べている。人間は「なぜ」という言葉に絶対的な回答をあたえることが出来ない。主人公の李徴は、この世界が根拠のない世界、論理的整合性がない世界であることを認識している。そして、彼はそのような存在論的な世界が彼を虎への変身させたことの一因であるとも考えている。

カフカと同じように中島も常に絶対的なもの、不壊なるものを求めている。すなわち、人間存在の不安を解消することを願望している。『山月記』のなかでは、作者の中島は、その主人公の李徴を変身させ、絶望の淵に立たせる。しかし、同時に中島は、真なるもの、不壊なるものに対する憧れを有している。その気持ちを彼は、和歌のなかで表現している。

ぬばたまの宇宙の闇に一とこゝろあかるきものあり人類の文化。

(『中島敦全集』2巻、「和歌でない歌」266頁)

この和歌には、文学に対する限りない憧憬の念を感じ取ることが出来る。中島は学生時代、ゲーテの『詩と真実』を読み、次のような読後感を述べている。

私は、『詩と真実』の冒頭の部分を思ひ出していた。そこには、この詩人が誕生した日の瑞象に満ちた星座の配置が自己の偉大さへの自信にあふれた筆付きで記されている。高等学校の理科三年のとき、第二外国語の教科書として此の書物が見つかれ、この冒頭の所の訳読が私にあたったのではっきり覚えているのである。(『中島敦全集』1巻、「かめれおん日記」384頁)

中島は、ゲーテの自伝、『詩と真実』を読み、その人生に対する自信と確信に満ちた古典主義的な世界にも、憧れをいだいていた。彼はその気持ちを和歌の中でつぎのように表現している。

ある時はゲーテ仰ぎて吐息しぬ亭々してあまりに高し。(『中島敦全集』2巻、「和歌でない歌」264頁)

中島は自分の分身である李徴に、「まったく何事も我々には判らぬ、理由も分からずに生きていくのが。我々生きものさだめだ」と述べさせ、人間の認識能力に疑問を持ち、ニヒリズムの極致に陥る。しかし、同時にゲーテの『詩と真実』の冒頭に感激し、暗闇のなかに希望の光を見出そうとする。すなわち、彼の心には、絶望とその反対の真なるものへの憧れが併存していたといえる、このような考え方は、カフカの文学に類似している。カフカと同じように中島は、現実の世界は不条理に満ちていることを認識しているが、同時にカフカが

ゲーテの文学の中に救済の光をもとめたように、中島もゲーテの世界に永遠の安らぎを求めようとした。

中島は、前述したように1920年から30年代のヨーロッパの文学世界にかなり精通していた。好村富士彦は中島の文学について、カフカ文学に接した日本の作家たちに比べ、中島のカフカ理解は、「自分の作品に新機軸を出すために、目先のか変わった最新の欧米文学のスタイルを取り入れるといったたぐいのものでない」と分析している。そして、さらに、「むしろ逆に中島敦は、カフカの世界を自己の内部に孕んでいたからこそ、何の先達もないままカフカ文学の本質的なものを的確につかみだすことができたのである」(注23)と、述べている。適切な解釈である。しかし、中島とカフカとの間には決定的な違いもある。それは、カフカが19世紀から20世紀初頭のチェコスロヴァキアに生まれ、ドイツ系ユダヤ人として、当時の中部ヨーロッパの世界で、民族にまつわる様々な社会矛盾を冷静に直視し、それらを特に中期、後期の作品のなかで描いたことである。

本論文の基本テキストは次のとおりである。

- (1) 『中島敦全集』、筑摩書房、2001～2002年
- (2) 『カフカ小説全集』、白水社、2001年
- (3) 中島敦の作品のドイツ語訳：Atsushi Nakajima *Der Tiger im Mondlicht und andere Erzählungen* 訳者：Stefan Wundt und Nobuhiro Kawauchi 国際語学社 東京 2000年

注

- (1) シンポジウムの総合テーマ；*Franz Kafka—Wirkung, Wirkungsverhinderung, Nicht-Wirkung*
- (2) シンポジウムでの筆者の発表論文：*Die frühe Kafka-Wirkung in Japan: Die Zeit vordem Zweiten Weltkrieg*
- (3) シンポジウムについて出版された書籍の題名：*Franz Kafka Wirkung und Wirkungsverhinderung* 出版社：Böhlau Verlag Köln Weimar Wien.
- (4) シンポジウムについて出版された書籍の筆者の論文題名：*Die frühe Kafka-Wirkung in Japan: Die Zeit um den Zweiten Weltkrieg* (本論文では、第二次世界大戦前・戦中のことばかりでなく第二次世界大戦後の初期のカフカ受容についても若干触れている。)
- (5) チェコスロヴァキアは、1993年チェコとスロヴァキアに分離した。チェコの首都はプラハ(ドイツ語ではプラーク)。
- (6) 1963年(昭和38年)の5月、プラハ近郊のリブリツェで、カフカの国際会議が開催された。マルクス・レーニン主義的な立場からカフカ文学を改めて検討し、再評価しようとするのがその目的であった。チェコ[スロヴァキア]の科学アカデミー付属チェコ文学研究所、カレル大学哲学学部等の共催であった。世界的に評価されはじめ

ていたカフカ文学であったが、チェコでは第二次世界大戦後（解放直後）の数年間を除いては、彼の作品は殆ど出版されていなかった。1968年、の春「プラハの春」の名のもとに、一連の自由化政策がなされたが、8月20日、ワルシャワ条約機構軍が侵攻し、自由化政策は終焉したのであった。

- (7) 岡村弘著：「**Franz Kafka** — 『寂寥』の階級制 —」独逸文学研究第一号、東京帝国大学独逸文学会編、東京、建設社。1932年(昭和7年)
- (8) カフカと日本の作家については、有村隆広・八木浩編『カフカと現代日本文学』、同学社（1985年）を参照のこと。
- (9) 「街の子供」は、新潮社版では『決定版カフカ全集1』では「国道の子供たち」、白水社の『カフカ小説集4』では「街道の子供たち」と訳されている。
- (10) マックス・ブロートはカフカの若い頃からの友人で、カフカ全集の編者である。カフカ文学は単にユダヤ性ばかりでなく、文学としての普遍性を有していると主張する。ウィリー・ハースもカフカの友人で、ブロートの説をさらに進めて、カフカはユダヤの神秘思想家であると論じている。
- (11) 「ドイツ文学」12号、1954年、日本独文学会編、13頁
- (12) **Willy Haas** : *Die literarische Welt – Erinnerungen*. Paul List Verlag, München 1960, S.33.
- (13) カミュの『シジフォスの神話』は、第二次世界大戦中の1941年に執筆され、1942年に出版され、戦後日本で翻訳された。
- (14) 『カミュ著作集』5巻、新潮社、昭和33年、151頁。
- (15) 同書、155頁。
- (16) 「変貌」は、「変身」のことである。本野はこの文を昭和15年に書いたので「変貌」という表現を用いた。昭和28年度の訳書『審判』の解説では、「変身」と改められている。
- (17) 本野享一：「不安と脱出 — フランツ・カフカ論」、『世界文学』2月号、世界文学社、1948年（昭和23年）、34頁
- (18) 『カフカ全集』5巻（池内紀訳）— 「ある戦いの記述 草稿B」 白水社、2001年、130～131頁。
- (19) 佐野幹『『山月記』はなぜ国民教材となったか』大修館書店、2013年、11頁
- (20) 山敷和男「人虎伝」と「山月記」、中島敦『山月記』作品論集（勝又浩、山内洋編）所収、近代文学作品論集成⑩ クレス出版 2001年、40頁。
- (21) アルキメデスの点は、はもともとギリシャのアルキメデスが発見した数学上の点のことである。カフカのいうアルキメデスの点はもちろん数学上の公理ではない。それは従来の伝統的な考え方、世界観を打ち破る画期的な視点ともなるべきものである。これについてエムリッヒは、アルキメデスの点から見れば、この世界には合目的性とか、あるいは因果律によってできる論理的整合性というようなものは存在

しない。この説明は、有村隆広『カフカとその文学』（郁文堂 1985年）の
42頁からの引用である。

(22) ゲーテ『ファウスト 悲劇第二部』（大山定一訳）、人文書院、昭和35年、35
6頁

(23) 好村富士彦「中島敦とカフカ」、池田浩士、好村富士彦ほか『カフカの解説』所
収、駸駸堂出版株式会社、昭和57年、331-332頁